Annual Bulletin of Clinical Center for Developmental Disorders, Shirayuri University

原著論文

移行対象およびイマジナリーコンパニオンの発生要因に関する心理学的再考

金内美也子

【要旨】

子どもに特有の現象である移行対象と空想の友達（以下，IC と略記）は，分離不安への対処法として前向きな働きをなすと考えられてきた。しかし，移行対象・IC の発生と母親の養育態度との関連についての検討は十分に行われておらず，詳細は明らかでない。とりわけ，近年母親の育児困難の問題が顕著である。それに並行して，虐待や産後鬱の問題も顕著である。母親によっては，ほどよい母親として機能せず，移行対象・IC は子どものネガティブな対処法を反映する結果になりかねないだろう。本研究では，移行対象・IC の発生要因を再考し，母子双方の困難感の規定因を探り，支援に繋げることを目的とした。

幼稚園と保育園に通う 1 歳から 6 歳の子どもをもつ母親を対象に質問紙調査を実施し，1,195 部の回答が得られた。その結果，移行対象・IC の発生要因は，ともに性別や出生順位などの子どもの属性が影響することが示唆され，感受性の強い女児や孤独感の強い一人っ子での高い発生率が認められた。続いて，移行対象と IC との所持では子どもの行動傾向が異なることが確認され，空想力が他者を思いやる原動力になることが示唆された。主題となる母子関係では，母子双方に困難さがみられる群においても発生が認められ，移行対象・IC は健全な母子関係の指標ではないことが示唆された。したがって，移行対象・IC が発生した場合は母子の関わり方を見つめ直し，子どもの情緒に寄り添うことが重要だと考えられた。

Key Words：移行対象，イマジナリーコンパニオン，分離不安，ほどよい母親

問題と目的

1. はじめに

乳児から幼児に至る過程での達成すべき心的発達とは，母親から身体的な分離をしていても不安を感じずに過ごせることである。つまり，乳児期の母子関係は一体化したものから，その分離を達成する。精神分析の多くの理論に共通しているのは，母親という内的対象・表象を心的世界に形成することである（Winnicott, 1953; Mahler, 1975; Klein, 1977; Bowlby, 1991）。これは母親と身体的に分離していても，心の中には母親が存在し，幼児が困難な状況に陥った時に心の中の母親像を思い出せるということである。子どもは母親からの分離という現実的な幻滅の体験に伴い，脱錯覚の過程をゆっくりと踏み出すが，このときに生じる分離不安への対処法として移行対象やイマジナリーコンパニオン（imaginary companion：以下，IC と略記）を使用することがある。しかし，分離不安への対処法である双方の発生と母親の養育態度との関連についての検討は十分に行われておらず，詳細は明らかでない。本論文では，子どもに見られる移行対象と IC の発生要因を多角的に再考し，母子関係の様相を明らかにすることで，包括的な支援に繋げることを目的とした。

2. 移行対象とは

イギリスの児童精神科医ウィニコットが「移行対象

白百合女子大学

と移行現象」という論文を1953年に発表して以降，移行対象という概念が子どもの心的発達を示す一つの現象として理解されてきた。移行対象とは，乳幼児が肌身離さず持ち歩くことで母親の不在時に起こる著しい不安を和らげる，最初の自分ではない所有物である（Winnicott, 1953）。具体的なものとしては，毛布，人形，ぬいぐるみ，あるいはその他の無生物が該当する。この現象は，ほどよい（good enough）母と子の関係性の中で現れる現象であり，乳幼児は母親に対する分離不安や抑うつ感情への対処法として移行対象を使用する。ほどよい母親とは，初めは子どもの欲求にほぼ完全に適応するが，母親の不在に対処する子どもの能力が次第に増大するのに応じて，徐々に適応の完全さを減らしていく健全な母親のことである。つまり，移行対象は健全な母子関係で現れると考えられる。ただし，これは母親対象が子どもの心の中で確立する途中での現象であり，すべての子どもに必須ではない。

3. イマジナリーコンパニオンとは

幼児期の子どもに見られる興味深い現象の一つに，“空想の友達”現象，すなわちICの発生がある。ICとは，次のように定義される。「それは目に見えない存在であり，ある一定の期間，少なくとも数ヵ月の間，名前を付けられ，他者との会話の中で言及されたり，遊ばれたりする。子どもにとっては現実的であるが，明白な客観的基礎は持たない。それは事物の擬人化や，子ども自身が別の人物になりきるような想像遊びとは異なる種類のものである」（Svendsen, 1934）。この定義によれば，ものが擬人化されたぬいぐるみなどは，目に見えるという理由でICには含まれない。一方，目に見えても子どもが空想の中で友達としている場合は含まれるとする研究者もいる（Taylor, 1999; 森口 , 2014）。いずれも，ICは子どもの空想の世界に発現し，その機能を果たすと考えられる。ICを子どもが創る理由では，“孤独への対処”“恐怖への対処”など，主に分離不安への対処が挙げられている（Taylor, 1999）。これまで，ICは子どもが日々直面する現実の困難さや辛さを乗り越えていくためのクッション役となり，後の創造的な想像力，適切な社会性，たくましいパーソナリティの獲得に向けて意義深い役割を果たしていることが示唆されている（Singer & Singer, 1990; 富田 , 2002）。

4. 心理学的視点からの再考

角張・小池・斎藤（2006）によると，乳幼児を育てる母親の多くは「子どもの存在そのもの」に日々「支えられている」と感じているものの，同時にその子どもと常に共に過ごすことでストレスを感じており「子どもと離れる時間が欲しい」とも感じていることが明らかになっている。その際，多くの母親が実際に園や身内に子どもを預けるのを躊躇し，子どもの状態を不安に思うことが報告されている（角張ら , 2006）。故に，子どもが自分の力で分離不安を乗り越える方法においては，多くの母親が関心を抱いてきた（小花和 , 2002）。子どもが分離不安を乗り越えることができるか否かは，母子分離を行ううえで重要なテーマであり，複数の研究者によって精神分析的知見が既に生み出されている。ここでは，母親の適切な応答性と統制によって，母子分離が達成されることが説かれている。

しかし，近年，母親の育児困難の問題が顕著である。わが国における都市化や核家族化，地域の繋がりの希薄化が進んだ結果，育児を取り巻く環境は大きく変化し，育児を助けてくれる人や相談できる人が親のそばにいないといった育児の孤立が問題となってきた（内閣府 , 2013）。さらに少子化に伴い，多くの親は実生活の中で乳幼児に接する機会が少ないままに大人になるため，親として子育てに不安を抱えている（文部科学省 , 2005）。虐待や産後鬱の問題も顕著である（内閣府 , 2013）。このように，子育てに困難感を抱きやすい時代背景を踏まえると，移行対象とICの発生要因に健全な母子関係が関連していると捉えることは，なお懐疑的になりうる。母親によっては，ほどよい母親（Winnicott, 1953）として機能せず，移行対象とICは健全な母子関係なしに，子どもの分離不安へのネガティブな対処法として発生しかねないだろう。Winnicott（1953）が主張するように，母親が子どもに欲求不満の体験を適時与えることは必要であるが，その際，子どもに過度な負担がかかっている可能性がある。ICを子どもが創る理由では，“恐怖への対処”“心的外傷に対する反応”も挙げられていた（Taylor, 1999）。母親の養育態度が良好であっても，母子分離の時期が早い場合には分離に対する不安への耐性が低いゆえに，移行対象・ICの所持に繋がる可能性もある。そこで，移行対象・ICの発生要因を，母親の養育態度ならびに母子分離の時期との関連に焦点を当てながら検討する。このことにより，母子関係の全人的な理解へと結びつくだろう。本研究では，子どもへの過度な負担は移行対象・ICの所持に繋がることのみならず，子どもの問題行動を引き起こす（Baumrind, 1971）ことも仮定する。なお，子どもの移行対象・

IC の所持については，母子関係以外にも父子関係をはじめとする他の養育者との関係性や養育環境について言及する必要性があるものと認識している。しかしながら，本研究では先行研究の再考という観点から母子関係のみに焦点を当てる。

一方，現実世界にて現れる移行対象と空想世界にて現れる IC を扱い，両者の相違を検討することには意義がある。分離不安を抱える子どもは，目に見える絶対的な存在としての移行対象によって心の安定を図りやすいと推測すれば，今後は IC にも視野を向け，空想力によって子どもが外界の出来事に対して臨機応変に心をコントロールすることが現代社会において期待される。これまでの臨床群以外による研究として子どもの空想活動を扱ったものがあり，Singer & Singer（1990）は子どもの空想遊びの豊かさと衝動の統制力の高さには正の関連があることを指摘している。Lynn & Rhue（1988）は，空想が孤独や苦痛，怒りに対して適応的あるいは補償的に機能する可能性があり，空想は個人が適応的に生きていくために良い影響を与えると述べている。空想傾向の高さは，他者の気持ちや状況を想像したり，それによって他者への暖かい気持ちを持つことに利用できる場合，高い社会的スキルを持つことができると考えられる（松井・小玉・岡田 , 2007）。このように，移行対象という目に見える物に頼らず，IC という目に見えない存在を通して，空想性を発揮しながら不安に対処しているか否かを検討することは，対人関係が複雑化し，思い通りにいかないことの多い現代社会を生きるうえで必要になってくると思われる。さらに，本研究では女児に多くみられると考えられてきた空想の豊かさが男児にも積極的に検討されていくことで，性別による違いが示唆されることも期待できる。思いやりの形成要因になりうる空想の重要性を再検討することは意義があると考えた。

以上により，移行対象・IC の発生要因に関して主に①子どもの属性，②母子関係に焦点を当てながら検討する。①では，双方の発生要因において既に性別・出生順位の影響があると示唆されているが，②の影響の程度と比較するために再考することとした。

方法

1. 調査協力者

調査対象者は，移行対象・IC の発現の開始時期で最も多い 1 歳からの子どもをもつ母親とした。関東地区にある 19 の保育園と 6 の幼稚園の母親に協力を依頼した。質問紙の配布数は保育園 1,775 部，幼稚園 935 部であり，有効回答はそれぞれ 525 部，670 部であった。母親の平均年齢は 37.7 歳（SD=4.69），子どもの平均年齢は 3.86 歳（SD=1.33）であった。

2. 調査時期

2021 年 5 月下旬～ 7 月下旬に行った。

3. 調査方法

個別自記入式の質問紙調査で実施した。調査実施にあたり，関東地区にある 19 の保育園，6 の幼稚園，ともに園長に対して調査の趣旨と実施時期や方法の説明を電話と郵送の文書にて行い，実施の了解を得た。その後，調査実施前に，改めて園長に対して正式な調査紙とともに調査に関する注意事項を記述した文書と，大学からの協力依頼文書を手渡し，説明した。8 の保育園，2 の幼稚園に関しては，調査紙等は郵送にて園に送られた。決定した実施期間に，担当の職員から保護者に届くよう手渡しされた。園の出入り口に回収用ボックスを取りつけ，保護者が入れる形式とした。質問紙は個別に封筒に入れ，回収は封筒に入れて封をしたうえで回収する形式をとっており，個人の情報が露出しないよう配慮した。保護者の方へのアンケートへの協力依頼については，回収箱にその旨を記載した文書を掲示した。

質問紙のタイトルは「子どもの行動に関するアンケート」とし，表紙には，小さなお子さまを育てる母親への支援に役立てるという趣旨，および，回収は強制ではないことを記載した。謝礼は提示していない。回答はいずれも無記名で行われた。質問紙は全対象者に対して同一とした。

4. 分析方法

質問紙は，①フェイスシート，②移行対象・IC について（富田・高尾 , 2014），③養育態度尺度（千﨑 , 2018），④子どもの行動尺度（中澤・中道 , 2007），⑤アタッチメント行動尺度（青木・南山・福榮・宮戸 , 2014）より構成されている。得点の標準化を行った対象は，有効回答者の 1,195 名であった。各因子の合計点を項目数で割った値を下位尺度得点としている。量的分析として，子どもの属性や性格に関しては χ^2 検定・対応のない t 検定，母子関係に関しては対応のない一元配置の分散分析を行った。

5. 調査内容

①フェイスシート

母親に関しては，年齢，就労形態，育児を手伝ってくれる人の有無，育児困難感の程度，夫の年齢，夫の育児参加の程度についての記述を求めた。子どもに関しては，年齢，性別，きょうだい構成，これまでの発達上の問題，保育園に預けだした時期についての記入を求めた。

②移行対象・IC について

子どもが移行対象・IC を持っているか，並びにどのような関わり方をしているかを測定するために，富田・高尾（2014）が先行研究（Gleasonet et al., 2000; 富田・山崎 , 2002; 富田 , 2003/2007）を参考に作成した質問項目＜移行対象＞と＜空想の友達＞を使用した。今回，内容の一部を保護者向けに変更して尋ねた。さらに，移行対象・IC に対する親の態度を測定するために，富田・本藤（2015）を参考に自由記述欄にて詳しく回答を求めた。

③養育態度尺度

母親の養育態度を測定するために，千﨑（2018）が先行研究（花田・小西 , 2003; 唐・矢嶋・桐野・種子田・中嶋 , 2005）を参考に作成した養育態度尺度（17 項目）を使用した。回答は，「まったくそうではない」（1 点）から「いつもそうだ」（4 点）の 4 段階で求めた。千﨑（2018）は 5 件法であったが，今回は回答の集中と解釈の難しさを避けるために，著者に許可を得て 4 件法とした。尺度に対して最尤法のプロマックス回転を行い，3 因子構造が妥当であると考えられた。内的整合性を検討するために信頼性係数（Cronbach の α 係数）を算出したところ，「力に頼らない態度」因子で .82，「注目・関与」因子で .78，「適切な声掛け」因子で .80 と十分な値が得られた。各因子における得点を合計し，それを項目数で割った値を下位尺度得点とした。

④子どもの行動尺度

子どもの行動特徴を測定するために，まず Ladd & Profilet (1996) の作成した Child Behavior Scale の中から，中澤・中道（2007）が因子負荷量 0.4 以上で重要だと捉えた 35 項目を検討した。最終的に，類似した内容の項目を除いた 19 項目を使用した。回答は，「あてはまらない」（1 点），「時々あてはまる」（2 点），「あてはまる」（3 点）の 3 段階で求めた。尺度に対して最尤法のプロマックス回転を行い，4 因子構造が妥当であると考えられた。内的整合性を検討するために信頼性係数（Cronbach の α 係数）を算出したところ，「不安定」因子で .73，「衝動性」因子で .64，「思いやりの欠如」因子で .74，「排他性」因子で .68 とある程度の値が得られた。各因子における得点を合計し，それを項目数で割った値を下位尺度得点とした。

⑤アタッチメント行動尺度

母子関係の質を測定するために，青木・南山・福榮・宮戸（2014）がアタッチメント Q ソート法を参考に作成したアタッチメント行動チェックリスト（ABCL）を検討した。今回，類似した内容の項目を除いた 10 項目を使用した。回答は，「まったくあてはまらない」（1 点）から「よくあてはまる」（5 点）の 5 段階で求めた。尺度に対して最尤法のプロマックス回転を行い，2 因子構造が妥当であると考えられた。内的整合性を検討するために信頼性係数（Cronbach の α 係数）を算出したところ，「信頼」で .73，「分離不安への耐性」で .60 とある程度の値が得られ，採用するに至った。各因子における得点を合計し，それを項目数で割った値を下位尺度得点とした。

結果と考察

1. 子どもの属性との関連

移行対象・IC の発生要因と子どもの属性との関連を検討するにあたって，子どもの性別，年齢，出生順位との関連に焦点を当てて χ^2 検定を行った。まず，移行対象・IC の現在の発現率をそれぞれ Figure 1・Figure 2 に示す。

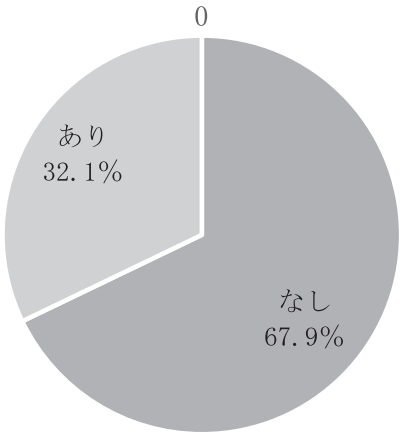

Figure 1　移行対象の所持（現在）と全体の発現率

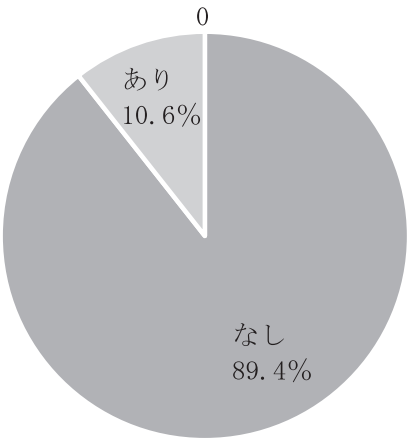

Figure 2　ICの所持（現在）と全体の発現率

χ^2 検定の結果，女児のほうが男児に比べて双方の発現率が有意に高いことが示唆された（Table 1）。森口（2014）が指摘するように，女児は外界の刺激に対する感受性が豊かなためであると考えられる。さらに，IC は高度な空想力を要するため，年齢が高くなるにつれて有意に発現率が増えると示唆された（$\chi^2(5, N=1166) = 17.108, p < .01$）。双方の発生要因としては，その他に出生順位が認められ，一人っ子が有意に多かった（Table 2）。孤独への対処法として用いることが考えられる。とりわけ，これらの子どもの属性は移行対象と IC の両方を持つ子どもに有意に表れており，女児・年齢の高さ・一人っ子という条件が双方を所持することに強く繋がっていた。

2. 子どもの行動傾向との関連

続いて，子どもの行動傾向との関連を検討するにあたって，対応のない t 検定を行った。その結果，移行対象と IC を持つ子どもの行動傾向はそれぞれ異なっていた。移行対象を持つ子どもは，不安定傾向が有意に強かった（$t(1173)=2.10, p < .05$）。移行対象を持ったとしても，心理的な痛みを完全に払拭できるわけではないことが窺えた。よって，移行対象を持つ子どもは繊細で内向的な行動傾向にあるといえる。一方，IC を持つ子どもは思いやりの強さが有意にみられ，松井ら（2007）が述べるように共感性の高さが窺えた（$t(1168)=2.15, p < .05$）。加えて，3 歳児では IC を持つ子どもは持たない子どもに比べ分離不安への耐性が有意に弱く（$t(249)=2.10, p < .05$），1 歳児では有意な傾向に留まっている。幼児期前半では，既存の理論のように分離不安に対処するという理由によって IC を持ちやすいと考えられた。このように，IC を持つ子どもは思いやりのある行動傾向にあり，かつ分離不安を感じた際には IC を持つことがあるといえる。

Table 1　男女別による移行対象・ICの発現度数

		子の性別	
		男児（n=544）	女児（n=621）
移行対象*	あり	152 (27.9)	224 (36.1)
IC**	あり	33 (6.1)	91 (14.7)

* $\chi^2(1, N=1165) = 8.768, p < .01$

** $\chi^2(1, N=1165) = 22.485, p < .001$

注：（　）内の数値は%を示す。

Table 2　出生順位別による移行対象・ICの発現度数

		子の出生順位			
		一人っ子	第一子	第二子	第三子
	n	307	281	421	87
移行対象*	あり	119 (38.8)	87 (31.0)	123 (29.2)	22 (25.3)
IC**	あり	45 (14.7)	34 (12.1)	33 (7.8)	7 (8.0)

* $\chi^2(3, N=1096) = 9.887, p < .05$

** $\chi^2(3, N=1096) = 9.704, p < .05$

注：（　）内の数値は%を示す。

3. 母子分離の時期との関連

母子分離の時期との関連は，移行対象・IC ともに有意でなかった。今回の結果から，双方ともに分離不安に対する耐性の高さは母子分離の時期で測れるものではないことが示唆された。Winnicott（1953）は，あくまでほどよい母親を通し，子どもは移行対象を用いて適切に分離不安を乗り越えることができると主張するが，双方の発生は子どもの属性も関与することが示唆された。

4. 母子関係との関連

母親の養育態度と子どもの行動および移行対象・IC の発生との関連を調べるために，まず母子関係グループを作った。手順は以下の通りである。養育態度尺度，すなわち育児困難感の得点を高低 2 群に分ける。さらに子どもの行動尺度，すなわち問題行動の得点を高低 2 群に分ける。最終的に，それらを併せて高低 4 群に分け，母子関係グループとした。育児困難，問題行動がともに強い母子は高高群，育児困難が強く，問題行動が弱い母子は高低群のようになっている。カットオフポイントの妥当性は，母子臨床の研究者および児童精神科医によって確認されている。移行対象・IC の有無も 4 群に分け，所持グループとした。

養育態度尺度は，育児困難を強く感じている人は点数が小さくなるよう構成されており , 平均は 40.58 点（SD ＝ 4.617, 中央値 41 点）で，19 点から 48 点に分布した。合計得点が平均から 1 標準偏差未満の人，すなわち，合計得点が 36 点未満の対象者を母親の育児困難感が高い群とし，それ以上を育児困難感が低い群とした。調査対象者の養育態度尺度 12 項目の合計点の分布を Figure 3 に示す。母親 1,190 名のうち 154 名に強い育児困難がある結果となり，その割合は全体の 12.9％であった。

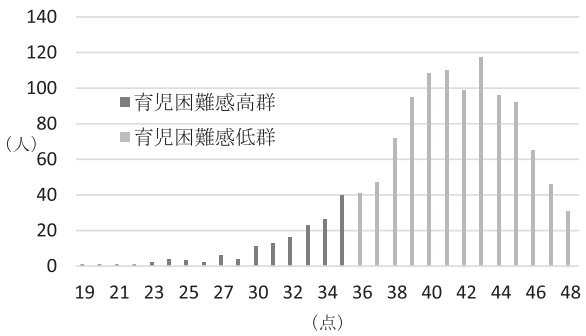

Figure 3　養育態度得点の分布

子どもの行動尺度は，問題行動傾向が強い人は点数が高くなるよう構成されており，平均は 26.53 点（SD ＝ 4.545, 中央値 26 点）で，18 点から 42 点に分布した。合計得点が平均から 1 標準偏差を超過する人，すなわち，合計得点が 32 点以上の対象者を子どもの問題行動が高い群とし，それ未満を問題行動が低い群とした。調査対象者の子どもの行動尺度 18 項目の合計点の分布を Figure 4 に示す。子ども 1,133 名のうち 163 名に強い問題行動傾向がある結果となり，その割合は全体の 14.4％であった。

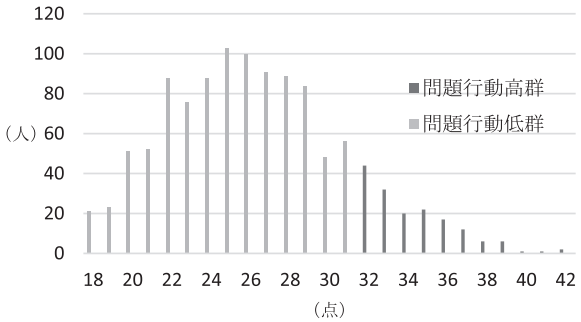

Figure 4　子の行動得点の分布

移行対象・IC の発生要因と母子関係との関連を検討するにあたって，対応のない一元配置の分散分析を行ったところ，有意な差は認められなかった（Table 3: $F(3,1191)=1.18$, *n.s* ; $F(3, 1191)=1.97$, *n.s.*）。

しかし，移行対象のみ群，IC のみ群，両方あり群は低低群以外においても認められており，移行対象・IC は健全な母子関係の指標にならないことが示唆された。所持の状況下における母親の養育態度および子どもの行動を把握するために，移行対象と IC それぞれにおいて対応のない t 検定を行ったところ，IC を所持する場合は母親が適切な声掛けをする傾向が有意に弱かった（$t(1176)=2.67, p < .01$）。続いて分散分析を行い，年齢別にみたところ，5 歳児の IC のみ群は子どもの問題行動と排他性傾向が有意に強く，6 歳児は母子関係の不良と衝動性傾向が有意に強かった。5 歳児・6 歳児の結果をそれぞれ Table 4・Table 5 に示す。

Table 3　母子関係グループ4群における移行対象・ICの発現度数

			移行対象・IC の所持グループ			
			両方なし	移行対象のみ	IC のみ	両方あり
母子関係グループ	低低	*n*=914	576	251	45	42
		低低群中の割合 (%)	(63.0)	(27.5)	(4.9)	(4.6)
	低高	*n*=127	74	34	10	9
		低高群中の割合 (%)	(58.3)	(26.8)	(7.9)	(7.1)
*育児困難が弱く，問題行動が強い→低高	高低	*n*=118	74	29	5	10
		高低群中の割合 (%)	(62.7)	(24.6)	(4.2)	(8.5)
	高高	*n*=36	24	6	3	3
		高高群中の割合 (%)	(66.7)	(16.7)	(8.3)	(8.3)
	合計	*n*=1195	748	320	63	64
		全体の割合	(62.6)	(26.8)	(5.3)	(5.4)

Table 4　所持グループ4群における子の得点の平均値とSDおよび分散分析の結果（5歳児）

		①両方なし群	②移行対象のみ群	③ IC のみ群	④両方あり群	F 値
	n	215	81	27	20	（多重比較）
問題行動	平均	0.13	0.09	0.30	0.25	3.25*
	SD	0.34	0.28	0.47	0.44	(①②<③)
排他性	平均	1.40	1.51	1.63	1.40	2.90*
	SD	0.41	0.51	0.48	0.50	(①<③)

*$p < .05$

Table 5　所持グループ4群における母子の得点の平均値とSDおよび分散分析の結果（6歳児）

		①両方なし群	②移行対象のみ群	③ IC のみ群	④両方あり群	F 値
	n	66	24	2	5	（多重比較）
母子関係グループ	平均	10.30	10.25	11.50	11.00	3.13*
	SD	0.72	0.61	2.12	1.00	(①②<③)
適切な声掛け	平均	2.80	2.99	2.17	2.27	3.15*
	SD	0.55	0.51	1.65	0.50	(①②>④)
衝動性	平均	1.33	1.24	1.71	1.54	3.16*
	SD	0.22	0.31	1.01	0.33	(②<③④)

*$p < .05$

総合考察

本研究により，移行対象・IC の発生要因は性別や出生順位などの子どもの属性が影響していることが明らかとなった。その他の要因としては，母親の養育態度が考えられた。母子関係ごとの発生メカニズムを Table 6 に示す。

Winnicott（1953）が“抱える環境（holding environment）”の概念を提唱するように，ほどよい母親が十分に機能しない環境下では，子どもは過度な不安感もしくは万能感を抱きやすく，結果として苦痛が生じ，分離不安に対処することが難しくなる（Abram & Hinshelwood, 2018）。しかし，本研究では育児困難感高群の子どもにおいても発生が認められており，ほどよい母親でなくても移行対象・IC を通して自身の気持ちに折り合いをつけようと試みることが可能だと考えられた。この場合，問題行動高群であれば子どもの発達的な問題や気質の問題が影響する可能性もあるため，慎重な解釈が求められる。例えば，自閉症児には移行対象と類似の自閉対象がみられること（Tustin, 1981）や，もともと内気で社会性の低い子どもは IC を持ちやすいこと（森口 , 2014）が報告されている。さらに，低高群に関しては前述した発達的な問題や気質の問題以外にも，母親自身に認めたくない葛藤的な育児困難感があり，それらが子どもに影響を及ぼし，所持では不安に対処することができない可能性も考えられる。続いて，高低群のように移行対象・IC が現れる状況下では母親のみが困難さを抱える場合もあり，子どもは“ほどよい母親”（Winnicott, 1953）が外的対象かつ内的対象として機能せずとも，頭の中での幻想的な思考や身近にある大切な物に頼って不安に対処することがあると考えられた。すなわち，移行対象・IC は健全な母子関係の指標ではないということである。ほどよい母親が機能しないということは，子どもの心理的ウェルビーイングにも悪影響を与えかねない。移行対象・IC が発生した場合には，母子の関わり方を見つめ直し，子どもの情緒に寄り添うことの重要性が示唆された。

また，本研究では移行対象を持つ子どもは不安定傾向が有意に強く繊細であるのに対し，IC を持つ子どもは思いやり傾向が有意に強く共感性が高いことが示唆された。共感性の高さは，自己および他者を労わることに繋がる（松井ら , 2007; 森口 , 2014）。その結果，心理的ウェルビーイングも高まると考えられる。現実世界で良好な対人関係を築き，かつ自己肯定感を得ていくためにも，子どもの創造的な世界観を尊ぶ姿勢は重要であると考えられた。

今後の課題

自閉症児の中には，いつも固いおもちゃやぬいぐるみを常時離さない子どもがいるが，これは一般的には移行対象としてみなされる。自閉症児への精神分析的心理療法に深く関わった Tustin（1981）はこれを移行対象と区別して自閉対象としたが，こうした病的な移行対象も知られている。さらに，自閉症児は対人的相互性の欠如により IC を持つことがあるという報告もある。このように，移行対象・IC の発生と発達的特性との関連をみていくために，実際に診断を受けている子どもを対象に研究を行う必要があるだろう。また，質問紙で得られた移行対象・IC に対する子ども

Table 6　母子関係グループ4群における移行対象・ICの発生メカニズム

※育児困難かつ問題行動が弱い 低低群	※育児困難が弱く , 問題行動が強い 低高群	※育児困難が強く , 問題行動が弱い 高低群	※育児困難かつ問題行動が強い 高高群
ほどよい母親が 機能している ➡移行対象・IC の必要性は 徐々になくなる	①子の発達的な問題や 気質の問題が影響する可能性 ②母親の葛藤的な育児困難が 影響する可能性	母親の育児困難感が強く , 移行対象・IC を所持することで 子は安心を得ている	①母親の育児困難感が過度に強 く , 所持だけでは不安に 対処できない可能性 ②育児困難感の強さには 影響されず , 子の発達的な問題や 気質の問題が影響する可能性

の関わり方の回答は養育者の主観的な意見であり，実際に子どもを対象として調査することが望ましいと考えた。最後に，本研究では既存の理論との関連をみるために母親と子どもの関係性をみていったが，アンケートに回答してくださった中には母親に限定することに不快な気持ちを抱く者が多数いた。現代社会において，子育てをするのは母親という認識は既に古く，理論を再考するのであれば母子の愛着を調べたい趣旨を事前に提示する必要があるだろう。今後は調査の対象を母親に限定せず，あくまで養育者との関係性を考えていき，柔軟性のある研究に仕上げることが重要だといえる。

謝辞

本研究は令和 3 年度白百合女子大学大学院文学研究科に提出した修士論文を加筆修正したものです。ご指導いただきました木部則雄先生に心より感謝申し上げます。また，質問紙調査にご協力くださった皆様，ご多忙にもかかわらず園における配布や回収に時間を割いてくださった園長先生をはじめ，各園の先生方に深く御礼申し上げます。

引 用 文 献

青木豊・南山今日子・福榮太郎・宮戸美樹 .（2014）. アタッチメント行動チェックリスト　Attachment Behavior Checklist : ABCL の開発に向けての予備的研究―児童養護施設におけるアタッチメントを評価するために―.　小児保健研究 , 73(6), 790-797.

Abram, J., & Hinshelwood, R. D. (2018). The Clinical Paradigms of Melanie Klein and Donald Winnicott. *Routledge.*（エイブラム , J & ヒンシェルウッド , R. D. 木部則雄・井原成男（監訳）（2020）. クラインとウィニコット――臨床パラダイムの比較と対話 . 岩崎学術出版社）

Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monograph*, 4, 1-103.

Biblow, E. (1973). Imaginative play and the control of aggressive behavior. In J.L. Singer (Ed.), *The child's world of make-believe*. New York: Academic Press. 104-128.

Bowlby, J. (1991). *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. Basic Books.

小花和 Wrisht 尚子 .（2002）. 幼児期の心理的ストレスとレジリエンス .　日本生理人類学会誌 , 7(1), 25-32.

角張慶子・小池由佳・斎藤裕 .（2006）. 子育て支援に関する心理・福祉学的アプローチ（２）―地域子育て支援センター利用者におけるサポート感―.　日本保育学会第 59 回大会発表論文集 , 1046-1047.

唐軼斐・矢嶋裕樹・桐野匡史・種子田綾・中嶋和夫 .（2005）. 母親の子どもに対するマルトリートメントの構造化の試み .　日本保健科学学会誌 , 7(4), 269-276.

Gleason, T. R., Sebanc, A. M., & Hartup, W. W.（2000）. Imaginary companions of preschool children. *Developmental Psychology*, 36(4), 419-428.

Klein, M. (1957). Envy and gratitude. *International Journal of Psychoanalysis*, London: Hogarth Press.

Ladd, G. W., & Profilet, S. M.（1996）. The child behavior scale: A teacher-report measure of young children' s aggressive, withdrawn, and prosocial behaviors. *Developmental Psychology* 32, 1008-1024.

Lynn, SJ., & Rhue, J. W. (1988). Fantasy proneness hypnosis, developmental antecedents, and psychopathology. American *Psychological Association*, 43, 35-44.

Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*, Basic Books: New York.

Singer. D. G., & Singer, J. L. (1990). *The house of make-believe play and the developing imagination*. Cambridge: Harvard University Press.（シンガー , D. G.・シンガー , J. L. 高橋たまき・無藤隆・戸田須恵子・新谷和代（監訳）.（1997）. 遊びがひらく想像力――創造的人間への道筋 .　新曜社 ）

Svendsen, M. (1934) Children's imaginary companions. *Archives of Neurology and Psychiatry*, 2, 985-999.

千﨑美恵 .（2018）. 母親のネガティブな被養育経験が子育てに及ぼす影響―克服へのプロセスに注目して―.　白百合女子大学文学研究科博士論文 .

Taylor, M. (1999). *Imaginary companions and the children who create them*. New York: Oxford University Press.

Tustin, F. (1981). *Autistic states in children*. Tavistock: Routledge.

富田昌平・山崎晃 .（2002）. 幼児期の空想の友達とそ

の周辺現象に関する調査研究（１）. 幼年教育研究 , 24, 31-39.

富田昌平 .（2003）. 幼児期における空想の友達とその周辺現象に関する調査研究（２）. 幼年教育研究 , 25, 79-86.

富田昌平 .（2007）. 乳幼児期の移行対象と指しゃぶりに関する調査研究（２）. 中国学園紀要 , 6, 127-138.

富田昌平・高尾昌代 .（2014）. 児童期に空想の友達を持つ子どもの特徴 . 心理科学研究 , 35(1), 52-62.

富田昌平 .（2015）. 幼児期における空想世界に対する認識の発達 . 兵庫教育大学学校教育研究科博士論文 .

富田昌平・本藤沙也香 .（2015）. 子どもの空想の友達に対する親の態度 . 心理科学研究 , 36(1), 40-53.

Trionfi, G., & Reese, E.（2009）. A good story: Children with imaginary companions create richer narratives. *Child Development*, 80(4), 1301-1313.

内閣府 .（2013）. 平成 25 年版子ども・若者白書（全体 版 PDF 版 ）, http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/pdf_index.html. [検索日 2021 年 3 月 12 日]

中澤潤・中道圭人 .（2007）. 子どもの行動尺度（CBS）日本版の作成 . 千葉大学教育学部研究紀要 , 55, 97-105.

花田裕子・小西美智子 .（2003）. 母親の養育態度における潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙の信頼性と妥当性の検討 . 広島大学保健学雑誌 , 3(1), 55-61.

廣澤愛子 .（2010）.「解離」に関する臨床心理学的考察―「病的解離」から「正常解離」まで―. 福井大学教育実践研究 , 2010, 35, 217-224.

松井めぐみ・小玉正博・岡田斉 .（2007）. 空想傾向と共感性が社会的スキルに与える影響 . 日本心理学会第 71 回大会発表論文集 .

森口佑介 .（2014）. 空想の友達―子どもの特徴と生成メカニズム―. 心理学論評 , 57 (1), 529-539.

文部科学省 .（2005）. 平成 17 年版 文部科学白書 , http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/.../001/002/0102.htm. [検索日 2021 年 3 月 12 日]

Winnicott, D. W. (1953). *Transitional objects and transitional phenomena*. International Journal of Psychoanalysis, 34, 89-97.（ウィニコット , D. W. 橋本雅雄（監訳）（1979）. 遊ぶことと現実 . 岩崎学術出版社）

Psychological Reconsideration of Factors that Transitional Objects and Imaginary Companions

MIYAKO KANAUCHI

Shirayuri University

Transitional objects (TO) and imaginary companions (IC), which are phenomena unique to children, have been considered to play a positive role in coping with separation anxiety. However, the relationship between occurrences of TO / IC and mothers' attitudes toward parenting has not been sufficiently surveyed. The purpose of this study was to reconsider causes of TO / IC, to find out determinants of mother-child burdens, and to provide support for them.

A questionnaire survey was conducted to mothers with children aged 1 to 6 years old attending kindergarten or nursery school, and then 1,195 responses were obtained. The results suggested that children's gender, birth order, and other factors affected occurrences of TO / IC, with a higher incidence among impressionable girls and only children. It was confirmed that children's behavioral tendencies differed in possession of TO / IC. The occurrence was also observed in the group which both mother and child had difficulty with parenting and personalities. Therefore, it is important to reconsider mother-child relationship and to be attentive to emotional needs of children when TO / IC occurs.

Key Words: transitional objects, imaginary companions, separation anxiety, good enough mothers